

京都の躰を語る女性の会会報

おはようさん

第13号

わたしたちは躰といひささか古びた言葉をもち出し伝統と文化の町京都において今も息づく「躰」や「訓え」に学び語りそこから新しい子育て文化を提唱します

京都の躰を語る女性の会

〒616-0022

京都市西京区嵐山朝月町 68-8

京都府神社会館内

tel 075-863-6677

fax 075-863-6664

<http://www.net-k.co.jp/situke>

着物の躰

「躰」とは身を美しくと書きます。私はある高校の授業で日本舞踊を教えています。初めて浴衣を着せた時、「暑い」と袖を肩までめぐりあげ、まるで時代劇の今から喧嘩をする男衆の有様です。

もつともスカートも学校の規定より遙かに短くまくし上げ、足を「にゅう」とギリギリのところまで見せている彼女たちのする事です。から・・・「着物を着たら二の腕は見せません。だから乗り物のつり革を持つ時も片方の手を袖にそえましょう。」と講義を始めるとつまらなそうな顔で聞いています。ところが「男の人が一番ドキッとするのはねえ、浴衣を着て階段を上がる時に素足がちらっと見える時ら

しいよ」と話すと「きゃあつ」と歓声を上げます。「コップを取る時でも洋服だと何の気遣いはいらなけれど、着物の場合は袖が邪魔になるので、袖に手を添えるのよ。そうすること、

『動作』から『しぐさ』という表現に変わります。「Tシャツを着ている時は首の美しさには気付かなくても、着物で髪をアップに上げられると『なんてうなじの美しい女!』『首』から『うなじ』という表現に変わります。こんな話をしながらおじぎの仕方



を教えて一回目の講義が終わりま

す。「着物を着たら、おへそから指三本下、丹田(たんでん)を意識して背筋を伸ばしておじぎしてね。歩く時も同じ

ですよ。」と教えてやれば、次の授業には若い女性らしいすがすがしい挨拶をしてくれます。

二、三回着物を着れば始めは電柱が着物を着た様な娘もすっかり美しい姿になり、私を楽しませてくれます。

一回目の授業を終え、浴衣を脱ぎながら「開放感!開放感!」と飛び



してきもちがいいの」と言うようになりしました。

新調された着物はしつけ糸でしっかり躰されお客様の元へ届けられます。制約されることは大変窮屈かもしれませんが、そのお陰で生まれる美しさがあることを彼女らに教えたと思います。若者達に制約されることの大切さ、自由という責任の重大さを着物を通して気付いてくれればと思うこの頃です。

(宗家藤蔭流二代目 藤蔭静枝)

おがたまの木コンサート

さわやかに晴れ渡った七月十一日、これで二回目となる教育正常化コンサートが、今回より「おがたまの木コンサート」と名前を改め開催されました。会場は昨年と同じく「京都文化博物館別館ホール」。出演者も前回に引き続き、「マリオネット」のお二人にご出演いただきました。

今回のテーマは『想い想われふりふられ』あなたは自分が好きですか？』。なにかしら突飛なテーマのようにお感じになられるかも知れませんが、昨今の深刻な青少年の心の問題を解決するには、少年達の心を解き放つ人と人との愛の力が必要、そして純粋に恋する心を持ち続けて欲しいとの思いからこのテーマを掲げました。今年はお昼一部のみの公演とあって会場はほぼ満員となりました。

まずコンサートに先立ち、提言者の藤蔭静枝さんから開催趣旨を踏まえての挨拶を頂きました。引き続き、皇學館大學教授の橋本雅之先生より「確かな世界へ帰っていく物語―映

画『男はつらいよ』を通して』と題した講演が行われました。先生からは、かの国民的人気者『寅さん』が登場するおなじみの映画『男はつ



京都文化博物館別館ホール「旧日本銀行」でのコンサート

らいよ』には、「古事記」や「日本書紀」に語られる神話や伝承、また昔話など、私たちの遠い祖先がその当時の考え方を複雑に編み込んだ物

語に類似する、日本人独特の価値観や物事のとらえ方が盛り込まれており、何もかもが不確かな現代社会に生きる私たちが、「失われた絆」を回復するヒントが隠されている。といった内容のお話を、実際に寅さんの映像も交えながらご講演頂きました。講演は大変短い時間でしたが、その何ともユニークな先生の発想に、みな引き込まれるように拝聴しました。

そしていよいよ「マリオネット」のコンサートです。昨年のコンサートではじめてお二人の演奏を聴いて、再びご来場下さった、いわゆる「リピーター」の方もたくさんおられました。今年もポルトガルギターやマンドリン、マンドリユートと



『男はつらいよ』を題材にした講演会



マリオネットが奏でる音色に酔いしれる会場

お守りに宿る

いった楽器を駆使しながら、フアドを中心にポピュラー音楽、またCMやTV番組、また、お二人が映画などに実際に提供されているオリジナル曲など十数曲を披露頂きました。

予定されていた二時間はあつという間に過ぎ去り、おがたまの木コンサートは成功裡に幕を閉じました。

おがたまの木ってなあに？

古事記にアマテラスオオミカミが天の岩戸にお隠れになり、世界中が真っ暗になってしまう場面があります。その岩戸をお開け戴くため、アメノウズメノミコトが神楽を舞いますが、そのとき持つて踊っていた小枝がこのオガタマノキだと言われています。おがたまの木を持つ女神の周りに神々は集い、音楽を奏で歌ったのです。

また、漢字で「招霊木」とも書き、古くから神社などを中心に大切にされてきた特別な木で、実は一円玉にも描かれています。

寒の戻りの厳しい2月中旬から3月にかけて花が咲き、小さな天女が舞い降りてきたかの様に美しくかぐわしい香りを放つと言われる木、それがおがたまの木です。

岡山のある女性から、お守りともにお礼状が送られてきました。それは次のように綴られていました。

岩屋神社の神様、神主様、みな様、みこ様

わたしは鳥取県に住んでいる、十五歳の女の子です。そしてわたしは、京都に住んでいる男の子と、ずっと交際しています。彼は今十六歳で、去年高校入試のとき、岩屋神社の御守りをもって入試に臨み、見事志望高校に合格しました。

そしてわたしは、彼が入試の時にもっていた御守りももらい、毎日制服のポケットに入れ持ち歩き、毎日を幸せに過ごすことができました。また、三月六日、七日に、わたしも高校受験をし、やや難関といわれていた第一志望校に合格することができました。今では彼にももらった、この岩屋神社の御守りに感謝しています。

そこでとても失礼かと思いますが、御守りにとってもお世話になった

ので、岩屋神社におさめたいと思っています。毎日わたしのそばに居てくれたので名残惜しい気もしますが、御守りを休めてあげたいと思います。—中略—(この間に直接参拝できないので郵送することを詫びている)

わたしや彼にたくさんの幸せを届けてくださった御守り、神社の神様、神主様、みこ様、みな様に、とても感謝しています。ありがとうございます。



そして何より、一年三ヶ月長めに付き合ってくれた、大好きで、とっても大切な御守り・・・ありがとうございます。

この女性は、お守りが自分と彼にたくさんの幸せを届けてくれたので、お守りや神様、延いては神社の職員にまで感謝の言葉を述べた上で、お守りを神社に納めたいと書いていますが、よく読むと興味深いことにふれています。それは、「名残惜しいが休ませてあげたいので、神社に納める」と彼女が考えたことです。深い愛着は感じているものの、重荷になったのでしょうか。お守りがたくさんの幸せを届けてくれたことを過去形で語っています。あるいは合格祈願のお守りは、既にその役目を終えたと思ったのでしょうか。あるいは、彼とともに受験を乗り切り、新しい高校生活のスタートを間近に控えて、気持ち切り替えたかったのかもしれないが、「休ませてあげたい」とはどういう意味なのでしょう。お守りが休むと神様も休めると考えたのでしょうか。

手紙は、「長めに付き合ってくれた、大好きで、とっても大切な御守り・・・ありがとう」と締めくくられています。そこにはお守りへの彼女の思いが滲み出ているようです。それでもこの女性はお守りを納めるという。それは少女から成人女性へ

の、この女性なりの通過儀礼なのかもしれません。

お守りは一般的に神社から授けてもらいますが、この女性のように大切な人から贈られると、お守りに特別な気持ちがかもるようです。贈る人の気持ちが入められたお守り。そこには、人が人を思いやる気持ちが神様への願いと重なりあつて「聖なるもの」となり、贈られた人を守るように思えます。お守りが神威の象徴から、神霊の宿るものへと昇華したかのようです。あるいは、日本人特有のアニミズム（万物に命が宿っていると考えること）かもしれません。

最近、「テクノ・アニミズム」という言葉が聞かれるようになってきました。それは「ペットロボットを本物のイヌやネコのようにかわいがり、癒される。パソコンを「かわいい」とめて、ソフトに「太郎」や「勘定奉行」などの人間の呼称をつける。マイカーをいとおしそうに磨き、ハンドルを握るときがもつとも落ち着くという人もいます。このように現代の人間が今日の高度な技術によって製造された機械に、あたかも生き物

に存在するような「魂」を感じ、交換しあう心性のこと」（『文化人類学最新述語100』弘文堂）だそうです。



ペットロボット AIVO

日本人には無神論者が多い、日本人は宗教に対して節操がない、などいわれますが、案外日本人の宗教観とは、このようなところにあるのかもしれない。万物に霊的存在を認めることは「人類の原初形態から現代におよぶ最も基本的な宗教観念」（『宗教民俗学』宮家準著東京大学出版会）なのだそうです。

（岩屋神社宮司 室田一樹）

おしらせ

作法というものは、動作を縛ったものであるといえます。「縛る」という言葉からは、大変窮屈な印象を受けますが、最も理にかなった動きをした時、それが作法と同じ動作を行っていることに気付かされることがあります。

おおよそ作法とは、文化を体現したものであり、我が日本において作法を尊ぶものの中には、伝統と文化の薫りと凛とした精神をも垣間見ることが出来ます。

日本舞踊などは、その代表的なものの一つと言えるでしょう。

最も趣があり、優雅に、可憐に等々の動きを極め続けた結果が、舞の動作をして作法へと昇華させました。

今回の例会は、京都の躰を語る女性の会提言者の一人である、宗家藤蔭流藤蔭会二代目藤蔭静枝様による舞の奉納観覧と講演会です。会員の皆様はもとより、お知り合いの方も誘い合わせ戴きまして、多数の皆様の参加を心よりお待ち申し上げております。

編集後記

当会の大きな活動の一つとして行われている「おがたまの木コンサート」も、おかげさまで無事終えることが出来ました。これも皆様のご理解とご協力の賜であり、厚く御礼申し上げます。しかし、今回の「おがたまの木コンサート」のアンケート結果を見ますと、マリオネットライブに比べて、講演の部は難しいという意見が目につきました。「おがたまの木コンサート」は、本会が今まで学び得た「躰」や「訓え」を広く一般に、受け入れやすい形で伝えていくことが目的ですから、この結果は重く受け止めなくてはなりません。今後も本会の意義がより一層果たされる様、更なる研鑽を積み、様々な形で世に訴えかけていきたいと思っておりますので宜しくお願い致します。（三）